

向井潤吉アトリエ館

世田谷美術館分館

向井潤吉
民家とくらし 生彩あふれる人々の営み4月2日^土—7月24日^日

向井潤吉の画家としての半生は、日ごとに失われていった「民家のある風景」を追い求めることに費やされました。それぞれの作品には、四季折々の豊かな風韻が満ち、その土地で歴史を築いてきた人々の、温かい生活の音が聞こえてくるようです。

人々は、農業、畜産、養蚕、漁業など、気候、風土に密着した生業をもち、その営みは、各地域で独特な生活のかたちを、つくり上げてきました。

「…中産農家の多い土地では、生活の裕福を証明するようにどの家も妙に取り澄まして、まるで芝居い所割を見るような、ある味気なさの表情をしている。(略)…その几帳面な優等生を見るようなソ

ツのなさが、結局素通りさせる要因なのである。」(『萌春』第29号 昭和35年6月)

この向井自身の言葉から、彼は整然とした豪華な邸宅や、高雅な庭園を眺めるよりも、農具や、洗いざらしの布や着物が干された軒先に、日々の精励な人々の暮らしぶりを見出していたのではないのでしょうか。

季節ごとに美しく色彩の変化する山々や、野を渡る風など、自然の風物と息を揃える民家の佇まいに出会った時、向井はその場に広がる生活の風景を丹念に見つめたのでしょうか。向井は心身で感じ取った様々な事象を、一枚のキャンパスに描出

しようしました。風雪に耐え、家を守るカッチョ(風よけ用の木の塀)のある十三湖に面した家並み(青森県)、梅雨晴れ空の下に洗濯物を並べる丸亀(香川県)の濱通り、農作業に励む農夫の姿を遠くに望む峠の村(岡山県)。

それぞれの土地に根付いた、生の営みをいかに表現するかということを、向井は常に一人の生活者として模索し、制作を重ねていったのではないのでしょうか。

本展では、向井潤吉の心を惹きつけた、静かで、ささやかな日常の営みを続けた人々のくらしと、それを支えた風景を辿っていききたいと思います。



1



2



3



4

- 1 《聚落》(山形県東田川郡朝日村田妻侯)制作年代不詳
- 2 《層雲》(青森県北津軽郡市浦村脳元)1964年
- 3 《梅雨晴れの濱通り》(香川県丸亀市)制作年代不詳
- 4 《与板にて》(新潟県)1945-1960年